

平成21年5月25日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19730479
 研究課題名(和文) 高校総合学習と青年期の内面的成長との関わり-“卒業研究”の縦断調査の事例分析-
 研究課題名(英文) Identity Formation through integrated learning in senior high school
 研究代表者
 高橋 亜希子(TAKAHASHI AKIKO)
 北海道教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：90431387

研究成果の概要：

現在高校においては、学習が数値による評価と伝達と習得の学習の型にはまりつつある。しかし、職業への移行が保障されなくなった中で青年期に必要な学びを再確認することが急務であろう。本研究は一人の生徒の総合学習過程の縦断的な分析を通して高校の総合学習が、他者や世界と出会い、これらとの対話と応答をとおして自己形成を行う過程であることを示した。また、ヴィゴツキーの理論に体験過程理論を加えた解釈枠組みを提出することにより、学習過程と自己形成過程の相互作用を分析する可能性を示した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：高等学校・自己形成・総合学習・思春期・青年期

1. 研究開始当初の背景

(1) 高校総合学習をめぐる状況

高等学校において総合的な学習が導入されて3年、今春初めて1年次より総合的な学習を履修した生徒たちが卒業する。中・高等学校では、総合的な学習の経験・実践数とも乏しく、現場では日々試行錯誤をしながら実践

を行っている。しかし、その中で総合的な学習は、学び方やものの考え方を習得させ、主体的な問題解決力を育成する領域として、一層の充実が求められている。

また、ニート・フリーターは、現在も青年の主要な問題であり続けている(玄田 2004 他)。その中で、高校におけるキャリア教育・職業意識の養成が重要視され、その一環を総

合学習が担うことがますます期待されている。

本来、総合学習を自己の再編期にある青年期の生徒が行うことには、大きな意義があると思われる。なぜなら学習課題の設定のために自らの興味関心を内に問うことは、自身の内面的なテーマを深く問うていくことに繋がる。探究を通して学校外の人びとや事象と広く関わることにより、自らの関心の所在を社会に位置づける機会を得るだろうからである。それは、進路選択を控え自らの方向性を見つめる時期にある生徒の自己形成に大きく寄与するものと思われる。

(2) 総合学習過程での生徒の内面的な変化
しかし、高校での生徒の総合学習の過程やそこで生じる変化を読み解く研究は現在少ない。高校総合学習に関しては、まず実施の困難やカリキュラム開発に関わる教師側の負担が多く報告されている(渡辺, 2004)。総合学習の成果に関する実証的な検討としては、総合学習の取り組みの状況や意識を数量的に検討した研究(文教総研, 1999)、生徒への質問紙調査により、実施校の生徒の自己効力感が高いことを示した研究(山崎, 2003)がある。これらの研究は総合学習に一定の効果があることを示しているが、実践のどの側面が個人に作用したのか、ということは示していない。幾つかの実践報告(吉田 1993 など)が生徒の内面的変化を記述しているのみである。

研究の理論面においても、自己形成や内面の発達という視点からの考察は意外にも少ない。総合学習の主要な理論枠組みとして、デューイの学習理論がある。デューイは、学習は自我と世界の相互作用であり、対象に対する興味が自我と世界を結びつけた。そして、興味を通して主体的に活動する中で得られる経験により、学習が生じるとした。しかし、デューイの経験は知性的な側面を主に示し、“自我”という用語を用いながらも生徒の中で興味や関心が育つ過程については詳細に検討していない。

高校総合学習を推進する立場の教員からは、実践の解釈枠組として、シティズンシップ教育(小島, 2000)、正統的周辺参加論(Lave & Wenger, 1991)などが用いられている。彼らは、ジェンダー理解や雇用問題など、現代社会の問題を多く取り扱い、社会人としての自立を重視している。そのため、社会・文化的な状況との対話や、共同体への参加に関する理論が多く用いられている。しかし、外界との関わりだけでなく、総合学習においては、自分史作成の試み(田中 1985)、社会人への聞き書きを一人称でまとめていく(藤本, 1995)など、生徒自身の内面を振り返るような活動も多く行われており、生徒の内面

に生じる変化を読み解く視点も必要であろう。

青年期は、抽象的な思考が発達すると同時に、物事の意味を求める志向性が生じ、内面世界が深まる時期である。それと同時に自分なりの意味世界やこだわりが生じ、それを通して社会とより深く関わり始める時期である(汐見 1990)。また、内面のテーマが現れては統合され、現れては統合される中で漸次的に自我の統合が行われていく時期である(村瀬 1985)。意味世界の深まりや内面のテーマは、生徒の学習のテーマと重なる可能性があり、学習の過程は外界と重ね、知識を得ることを通して、その課題を個人の中に統合していく過程にもなりうる。そのような心理過程と総合学習の過程を重ね、彼らの内面的変化を検討することも必要であろう。

2. 研究の目的

本研究では、高校総合学習を、生徒の人格発達をも支えうる学習と捉える立場に立つ。そして青年期の自我発達の観点から、生徒の学習過程の分析・検討を通して、学習過程が生徒の人格形成にどのような影響を与えているかに接近することを目的とする。研究の対象は、東京大学教育学部附属中等教育学校で行われている”卒業研究“である。”卒業研究“は、生徒が自身のテーマを定め、一年半に渡り探究を行なう形の総合学習である。その生徒の学習過程の事例の分析により、生徒の主観的な意味づけと内面的変容の過程を明らかとし、総合学習が青年期の生徒に与える影響を考察することを、研究の目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

調査対象は 東京大学教育学部附属中等教育学校の“卒業研究”実践である。“卒業研究”は生徒が一人ひとつ研究のテーマを定め、そのテーマに沿って1年半に渡り研究を行う、個別課題設定形式の学習である。1983年から20年来実施され、卒業の必須要件となっている。卒業研究は高校2年の4月から高校の3年の7月にかけて行われる。

(2) 調査方法

筆者は、研究協力校である東京大学教育学部附属中等学校で、1999年から2003年にかけて、学校の許可を得て、卒業研究実践の観察調査、面接調査を行い、実践の把握に努めた。そして2001年から2002年まで一学年の生徒に焦点を当てた3回に渡る縦断的な質問紙調査と、研究過程の継続的な面接調査(対象4人)を行った。そして、テーマ設定過程に関して、2004年に日誌法を用いて再調査を行っている。その他、実際の研究や、指導場面など研究の内容に関する資料を多く収集して

いる

今回は主に、1999年から2003年にかけて行なった1名の生徒(Kさん)の縦断事例の分析と解釈を中心にし、事例の作成と解釈を行なった。生徒の事例はテーマ設定時から、一月に一度の割合で30分~1時間かけ、計10回程度インタビューを行って得たものであり、研究過程だけでなく、本人の生育史や学校歴、進路に関しても聴き取りを行なったものである。

まずKさんのプロトコルを作成し、研究過程がわかる形で事例を作成する。その後、学習過程と他者との関わりに焦点を当てるために、解釈的な方法を用いて分析を行う。

4. 研究成果

(1) 事例作成と回顧調査

当該生徒に対する継続的インタビュー(2001年から2003年:計8回)のテープおこし作業を行った。また、その生徒に対する5年後からの回顧インタビューを平成19年11月17日に行った。学校外で当事者に出会ったことが、学習過程で動機の大きな変化に繋がり、その影響は社会人になってからも継続していた。また、学習と自己形成に関連する他の実践に対する分析として、千葉県立小金高校の『総合学習・環境学』に対する回顧インタビューの事例研究を行った。「卒業生にとっての高校総合学習の意味(2) 一自己形成と総合学習の接点」(第18回日本カリキュラム学会 2007年)

(2) 高校総合学習の背景分析:

また、事例分析の背景として、二つの分析を行った。

① 哲学教育と国民的な議論に根ざしたフランスの総合学習と日本の総合学習の性質と内容を比較した。

② 「戦後の高等学校における総合学習の歴史の変遷—青年期の「学び」の回復としての試み—」(中央学院大学社会システム研究所紀要、2008)として、戦後を、第1期(1948-1975):新制高校の誕生と進学率の拡大、第2期(1975-1990):学びの問い直しと総合学習の現れ、第3期(1991-2002):高校の多様化と総合学習の新たな展開、第4期(2003-):「総合的な学習の時間」の導入と低迷の4期に分けてまとめを行った。日本の高校の総合学習が、高校政策の影響を強く受けていること、しかし、大学入試選抜の色彩が強い中で、一貫して学びの回復としての意味を持っていたことを論じた。

(3) 高校総合学習と自己形成過程の関わりに関する解釈枠組みの生成

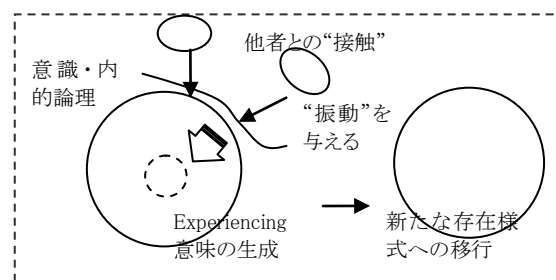
2008年度は事例分析の準備として、高校総

合学習と自己形成過程の関わりに関する解釈枠組みの生成作業を行った。具体的には① 先行研究である「地域学習・課題学習論」「正統的周辺参加論」「シティズンシップ教育・政治的判断力の育成」「自己形成課題の意識化」の4つの観点の整理とそれぞれの特徴の紹介 ② 発達理論に照らした青年期の認識・社会・自己との関わりについての特徴の整理 ③ ヴィゴツキーを基とした解釈枠組みの提示 の3つの作業を行った。高校での総合学習は、認識形成、社会や他者との関わり、自己形成が相互作用しつつ行われる学習であることを明らかとし、人間の発達を外界との相互作用と内界の意味システムの変容と捉えたヴィゴツキーの理論を総合学習過程の解釈に用いる可能性を示した。

(4) ヴィゴツキーの解釈枠組みによる事例の分析-他者との接触と自己形成の関わりに焦点を当てて

本研究ではある高校における一人の生徒(Kさん)の総合学習の学習過程の分析を通して、学外への訪問での他者との関わりの影響とそれによる生徒の存在様式の変容の分析を行った。

ヴィゴツキーを精神内平面(inner mental plane)に定位して読み解いた高木(2001)の“接触”と“振動”に関する概念を解釈枠組みとする。接触とは人と話したりなどの新たな他者との関わりを示す。振動は接触を通してKさんの中で生じた体験とその体験に対する意味づけを示す。意味生成(experiencing)とは振動を受けあえる一つのまとまりの事象全体に対する意味づけが変化することを示す。



Kさんは研究の仮説が崩れ、指導教員の支えもない中で、「消えてしまいたい」と思うほどの危機にあった。小児救急学会の新聞記事に直感的に惹かれ神戸へ出かけた。

Kさんは神戸訪問後に小児救急学会の主催者の教授、救急事故被害者の自助サークルの人々、夜間救急の医師らと“接触”している。その接触からKさんに①「人のやさしさ・暖かさ」の実感 ②「人の優しさの繋がり・やさしさの連鎖」への気づきという振動が生じている。救急医療事故の被害者である母親と

の“接触”においては、③ 話を聞いたことに対するやりきれなさや無力感 ④ 当事者である母親の心の痛みの認識 ⑤ 小児救急医療問題の深刻さの認識 ⑥ 子どもの命のもろさへの気づきの振動が生じている。またそれは人々との関係性を見直す機会となり ⑦ 友人の支えへの感謝 ⑧ 育ててくれた両親の愛情への感謝 という“振動”を生じさせている。

それらの接触を通して以下の意味生成 (experiencing) が生じている

やさしさの連鎖・相互性への気づき：②「人の優しさの繋がり・やさしさの連鎖」への気づきは、「やさしさの連鎖・相互性」という意味の生成を生じさせている。

研究目的の発見 ④「当事者の傷つきを知る」⑤「小児救急医療問題の深刻さの認識」という振動から「より多くの人に事実を知らせる」という研究目的を見出している。

周囲の配慮の存在への気づき：⑥ 子どもの命のもろさを知り「自分が両親や多くの人の配慮のもとに育ったこと」という自分の存在への意味づけが変化している。

自身の存在の意味の再定義：「自分の命は他者への責任がある」と自分の存在の意味を再定義し「やさしさを人に返す」ことを今後生きる意味としている。

ペレジヴァーニエの例：「対話をしているととても複雑な気持ちになった。実際に話を聞くことと本や新聞で事実を知ることにはかなりのギャップがあることを感じた。Mさんが発する一言一言がとても重く感じるのだ。Mさんは救急隊員の対応に対して「悔しい」と言っていた。私は忘れることができない。そのときの Mさんの気持ちを考えると、とても心が痛む。」(Kさんの卒業研究の本文より)

変化の生じた背景を以下に3つ挙げる。

① 他者との接触によるペレジヴァーニエの現れ：ヴィゴツキーは「外界からの刺激を経験する際に、それが個人の人格にとって重要なものとして経験された場合に生じる一連の真性の情動的体験」をペレジヴァーニエ (心的体験) と呼んでいる。Kさんは人々との接触を通し「嬉しい」「一言一言が重く感じる」という体験をしている。そのペレジヴァーニエが意味生成を引き起こしている。

② 「最近接発達領域」の準備：Kさんの神戸訪問前は仮説も崩れ、支援もない危機の状態であった。すなわち意味の生成に敏感な領域 (最近接発達領域) が準備された状態になっている。

③ 潜在的な求め (Inner referent) との呼応：彼女の卒業研究のテーマの根底には「信

頼できる医療とは何か」という潜在的なテーマ (Inner referent) があった。人との関わりは「人の暖かさ」「他者の支え」「信頼」をKさんが感じる機会となっている。

人と接触する中でKさんの中に感情を伴う体験がいくつも生じている。その振動が波のようにKさんの意味体系を塗り替え、最終的に存在基盤をも変化させている。他者との接触によりペレジヴァーニエが生じることが、学校外の他者と出会う際の変化の本質にあると思われる。

(5) 本研究の意義

① 学習過程と自己形成過程の相互作用を分析する解釈枠組の生成

高校での総合学習は、認識形成、社会や他者との関わり、自己形成が相互作用しつつ行われる学習である。しかし、現在までの学習理論においては、環境との相互作用を扱うことは可能でも、より深層の部分やアイデンティティ形成にまで繋がる分析を行うことはできなかった。

本研究では、ヴィゴツキーの理論に体験過程理論を加えることにより、学習過程と自己形成過程の相互作用を分析する解釈枠組を提出した。

② 青年期の発達支援としての高校総合学習の意義

現在の高校においては、子安(2008)が、「学びの貧困化」と呼ぶように公立、私立高校ともに進学対策へと傾斜する中で、学習が数値による評価と伝達と習得の学習の型にはまりつつある。しかし、青年期枠組みが変容し、職業への移行が保障されなくなった中で、高校で何を学ぶことが必要かを問い直し、青年期に必要な学びを再確認することが急務であろう。

本研究を通して、高校の総合学習が、他者や世界と出会い、これらとの対話と応答をとおして自己形成を行う過程であることを示した。それは、認識形成を通じた自己形成過程であり、高校総合学習が青年期の発達支援としての意味を持つことを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① 高橋亜希子『青年期の発達支援としての高校総合学習—認識・社会・自己の関わりに焦点を当てて—』(北海道教育大学紀要 59巻第2号 2009 pp.169-182. 査読無)

② 高橋亜希子「戦後の高等学校における総合学習の歴史の変遷—青年期の「学び」

の回復としての試み-」 中央学院大学
社会システム研究所紀要、2008
pp101-115 査読無

- ③ 大津尚志・高橋亜希子 高校総合学習の日仏
比較 高生研第45回全国大会研究紀要
2007 pp77-82 査読無

〔学会発表〕(計4件)

- ① 高橋亜希子 総合学習の動機を支える要
因-他者との関わりを通じた学習の意味
の変化 日本教育心理学会第50回総会
2008年10月11日 東京学芸大学
- ② 高橋亜希子 総合学習への取り組みの分
化の背景要因-学習過程に即した質
的・量的検討- 日本教育心理学会第
49回総会 2007年9月15日 文教大学
- ③ 大津尚志 高校総合学習の日仏比較 高
校生活指導研究協議会第45回全国大会
2007年8月6日 熊本大会
- ④ 川北裕之 卒業生にとっての高校総合学
習の意味(2)-自己形成と総合学習の接
点 第18回日本カリキュラム学会
2007年7月7日 埼玉大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 亜希子(TAKAHASHI AKIKO)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：90431387

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし